

Perry Rhodan Nr.2800

西暦 2015 年 4 月 17 日

Zeitriss von Michelle Stern

じわ 時割れ

刊行

Die Jenzeitigen Lande 時の彼方の国々サイクル開始

新銀河暦 1 5 1 4 年——

「〈アトプの秩序〉アトピックオールドの平和をあまねく広めたい」

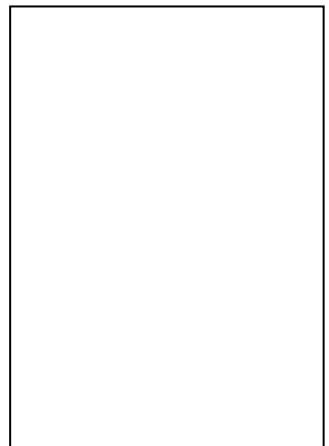
いきなり来訪したアトプの裁判官は「やがて銀河系に〈世界を滅す劫火〉
エクピュロスをもたらず、とペリー・ローダンを断罪。アトプの配下オンリ
オン人は銀河系を管理下に置く。

監獄惑星を脱したペリー・ローダンは、同じくアトプとオンリオン人の
管理下にあるラール人の銀河を経て、アトプの裁判官が〈時の彼方の国〉
から来たと知る…… 〈時の彼方の国〉に至るには〈時間転移ドライバー〉
を装備する裁判官船と、これを操船する資質を備えた者が要る。

銀河暦 1 5 1 7 年 1 1 月——

ペリー・ローダンはラール人抵抗運動組織の指
導者アヴェストリ=パシクと手を結び、故郷銀河
系を管轄する裁判官のひとりクヴの裁判官船《ク
ヴァンク》を拿捕。操船の資質を有する旧友アト
ランを操縦席に据えた。

かくして裁判官船《アトランク》は銀河系の〈導
体〉コンダクター から〈共時性の通路〉シンクロニーに
突入。〈時の彼方の国〉を目指す。



Zeitriss

じわ
時割れ

新銀河暦1517年11月、アトピック法廷の管理下の銀河系で、テラナーのペリー・ローダン、もとアルコン帝国皇帝ボスティク1世、ラール人の抵抗運動組織プロト＝ヘトストの指導者アヴェストリ＝パシクら一同は、反撃の狼煙をあげた。

＊

最終の目的は、人類の故郷銀河系とラール人の故郷であるラルハトーン銀河をアトプの裁判官やその配下オンリオン人らの管理から解放すること。当面の目的はアトピック法廷の本拠〈時の彼方の国〉に至り、一連の事件の経緯を根本から解き明かすこと。

そこに至るためには、〈時間転移ドライバー〉を装備したアトプの裁判官の船が要る。これを操縦する者も要る。本来、裁判官船が〈共時性の通路〉シンクロニー 内部を無事に航行し〈時の彼方の国〉に向かうにはアトプの裁判官の操縦が必須だが、同等の資質を備

えた者、たとえば〈物質の泉〉の彼岸に渡った経験を有する者なら操縦は可能だ。となれば、具体的な候補はペリー・ローダンの旧友、アルコン人アトランしかいない。そして、〈時の彼方の国〉に至る作戦のコードネームは〈最後の境界〉ウルティマ・マルゴ と決まった。

＊

作戦は……まず、もと皇帝ボスティク1世が武力蜂起し、裁判官クヴの船《クヴァンク》をおびきだす。これにペリー・ローダンとラール人アヴェストリ＝パシクが率いる部隊が突入し、アラス製の〈光遺伝子作用体〉を用いて裁判官クヴを制御下に置く。その上で、アトランが《クヴァンク》の操縦を引き継ぎ〈共時性の通路〉に突入する……というものだ。

銀河系にある〈共時性の通路〉の入口の所在もわかっている。

先だって、銀河系の球状星団M-13の星系アルコンで、アトピック法廷は惑星アルコンⅢを〈導体〉コンダクター なるものに変容せしめた。これこそ〈共時性の通路〉の入口なのだ。

＊

一同はおおむね予定どおり《クヴァンク》の拿捕に成功した。

裁判官船《クヴァンク》は青色をした巨船である。本体は卵型で長さ4500m、幅1500m。これを武装円陣 ファランクス が取り巻き、全長は8500m、全幅は3150mに及ぶ。だが、拿捕の過程で、当船が外観より遥かに広大な空間を内に抱えることが明らかになった。船は同期洞 シンカヴェルネ と称する〈0マイナス1次元〉の異宇宙をいくつも有し、〈時間転移ドライバー〉もそこに設置してある。そこで、ローダンは目下の乗艦《ラス・ツバイ》とアヴェストリ＝パシクの小型艇《ラルハトーン》を同期洞のひとつに格納し、〈時の彼方の国〉に向かうことを思いついた。

＊

《ラス・ツバイ》は最新鋭のスーパーノヴァ級の万能空母で、本体球殻は直径3000m、赤道環は直径3472mという巨軀を誇り、直径55mの《ラルハトーン》も今はその格納庫の一角に収容するのであるが、同期洞を用い

るならそのすべてを見た目の容積で劣る《クヴァンク》に格納することができる。

＊

裁判官船《クヴァンク》は、アトピック法廷が銀河系の拠点と定めた星系アルコンに向かう。途上、同期洞に潜伏した法務官ユニクス・フェルンの反攻に巻きこまれて裁判官クヴが死亡した。だが、船の自我ともいえる何かである〈アंक〉はアトランを次の操縦士と認め、船は呼称を《アトラン+アंक》＝《アトランク》と改めるに至る。

新司令官はペリー・ローダン。アルコン人アトランはいうなれば主操縦士を務め、特別な訓練を積んだエモシオ航法士……ハルト人アヴァン・タクロール、ペリー・ローダンの孫娘ファリエ・セフェロア、テラニア・アカデミー所属のノスモ人サム・バッタシェー、《ラス・ツバイ》の第一航法士タウロ・ラコバシ、以上4名が副操縦士を務める。

裁判官船《アトランク》は星系アルコンの〈導体〉に突入し〈共時性の通路〉に姿を消した。

1

船内時間の11月17日、〈共時性の通路〉を航行中の裁判官船《アトランク》の司令室で、照明が明滅した。〈共時性の通路〉の副次効果か、中央に浮かぶ指令球に座るアトランは体調を悪くしたらしく呼びかけても応答がない。ローダンはアトランに代わって〈アंक〉との対話を試みるが、その過程で自分を見失い、幻覚の中をさまよい……ようやくわれにかえって〈アंक〉に指示を出すことができた。

ローダンは〈アंक〉を介して同期洞と連絡をとり、《ラス・ツバイ》艦長ジャウナ・トゴヤに艦の安否を確かめる。その上で、同行するケロスカーのゴールドロディンの手を借りて《アトランク》本体と《ラス・ツバイ》の間にフィクティヴ転送機クレーンによる連絡路を開設した。

2

アトランは次第に体調を回復したが、以後も裁判官船の内部で〈共時性の通路〉の副次効果とお

ぼしき怪現象が相次ぎ、幻覚を見る、声を聞いてひとりごつ、自分を見たとき騒ぐ者などが続出する。司令室では副操縦士を務めるハルト人アヴァン・タクロールが暴れだし、グッキーが咄嗟にテレキネシスで取り押さえる事件が起きた。

*

ネズミビーバーのグッキーは5年前の事故でテレパシー、テレキネシス、テレポートの三種の能力をすべて失い、代わりに他の超能力者から超能力と生命を奪う異能〈パラ泥棒〉に目覚めた。以後、グッキーは超能力者4名から能力を奪ったが、先だつての法務官ユーニクス・フェルンとの戦闘で尋常でなく消耗した結果、またすべてを失ったかのように感じていた……のだが、事実はどうやら反対だった。5年前に失ったと思つた能力も含めて今またすべてが回復しつつあるらしい。

*

グッキーの幸運と対照的に《アトランク》船内の混迷の度合いはなおも深まる。ローダンは一同に《ラス・ツバイ》でサスペンド・

アルコーヴにかかるよう指示を出した。

＊

新銀河暦 1 3 3 1 年のハイパー物理学的抵抗の増大以降、従来の高度技術の多くが機能をやめた。《ラス・ツバイ》はこうした時代にも高速な銀河間航行が可能な超空間転移プログレス駆動を装備するが、この駆動系には欠点がある。稼働中に致死性の放射を出すのである。そこで、《ラス・ツバイ》は別にサスペンド・アルコーヴという装置を乗員の数だけ備えていた。銀河間航行のあいだ、乗員はすべてこの装置にかかって一時的に非物質化し、超空間転移プログレス駆動の致死性の放射をやりすごすのだ。

＊

今回のローダンの発案は、同様にサスペンド・アルコーヴを利用して〈共時性の通路〉の副次効果をやりすごそうというものだ。とはいえ、操縦士だけは《アトランク》を離れるわけにいかない。

女性科学者シク・ドルクスタイゲルは、アンストレスタ銀河に暮らすハトル人の末裔＝アトル人だ

が、どうやら〈共時性の通路〉の副次効果が及ばないらしい。そこで、ローダンは彼女にアトランと裁判官船《アトランク》のことを任せ、自分も《ラス・ツバイ》に移るとサスペンド・アルコーヴにかかった。

3

数時間後、《ラス・ツバイ》艦内に警報が鳴り響いた。同時に艦内各所のサスペンド・アルコーヴは自動で全乗員を再物質化する。

ローダンは一番に司令室に駆けこみ、何はともあれ《アトランク》と通信をつないだ。

シク・ドルクスタイゲルによれば、《アトランク》が何か事故を起こしたことは確かだ。だが現在は操縦者アトランが一種の催眠状態にあって何ひとつ情報を引き出せない。現在位置も……現在時間も不明なのだという。

＊

探知と分析の結果、《アトランク》の現在位置は銀河系の主平面の下方 1 5 万光年であるとわかった。M-13 球状星団の〈導体〉から現在位置まで〈共時性の通

路)に〈時割れ)とでもいうべき亀裂が走り、《アトランク》は〈共時性の通路)が変形し外にめくれあがったすぐ内側にいた。そして、今が何年かもわかった……西暦紀元前2010万3191年である。

＊

かねてより知られるように、ファリスケ=エリゴン銀河と呼ばれた昔の銀河系に超知性体アルケティムが平和をもたらすのが西暦紀元前2006万4820年のことである。2010万年以上前の当地の状況はまったくといって良いほど知られていない。

いったい《アトランク》に何が起きたというのか……主操縦士が意図的に舵を切った結果であることに間違いはない。だが、アトランが望んでそうした無謀な操縦をしたとも考えにくい。

4

今度は《ラス・ツバイ》で爆発が起きた。〈アंक〉は同期洞から小型船1隻が飛び出たことを報告する。《ラス・ツバイ》に格納していたルール船、直径55m

の《ラルハトーン》である。

報告をうけて、ローダンの中でいくつもの出来事がひとつながりにつながった。

ルール人アヴェストリ=パシクがすべてを仕組んだのだ。

＊

先般、ローダンは銀河医師族アラスの大長老ゼオビトのクローン息子ザルダングに〈光遺伝子作用体)の開発を依頼し、これをウルティマ・マルゴ作戦に投入した。《クヴァンク》拿捕の時、このナノマシンを裁判官クヴの体内に送りこみ、光信号を介して裁判官クヴを操作したのである。

ルール人アヴェストリ=パシクもゼオビトから別の〈光遺伝子作用体)を入手したに相違ない。

思い返せば、作戦前夜……疲労の溜まったアトランはルール人女性の整体にかかって英気を養った。あの時、彼女がアトランに〈光遺伝子作用体)を仕込んだのだ。先刻の《アトランク》司令室の光の明滅はルール人が用意した光制御信号だったのだ。

＊

ルール人の故郷銀河ラルハト

ーンは人類の銀河系よりも以前からアトピック法廷の管理下にある。ラール人アヴェストリ＝パシクは抵抗運動組織プロト＝ヘトスの指導者であり、アトプ支配の打破を当面の目標に据える。だが、じつのところその宿願は公会議ヘトス時代への回帰である。

＊

ラール人はかつて誇り高き七種族のヘトスの一員だった。

だが西暦3581年、ペリー・ローダンと《ソル》がヘトスの本拠地ダッカル次元バルーンで闇のスペシャリストを解放し、諸銀河をつなぐ次元トンネルが通行不能になった結果、ヘトスは瓦解した。以後、ラール人はかつての誇りを失い、内乱の果てにアトピック法廷の管理下に置かれることになった。

＊

アヴェストリ＝パシクの中にはアトプとオンリオン人を憎む気持ちがある。だが、さらに深いところには〈すべてを破壊した男〉ヘトルク・テッサーすなわちペリー・ローダンへの恨みがある。今回テラナーと手を組んだのも、共

通の敵であるアトピック法廷の本拠〈時の彼方の国〉に乗りこむというから一枚噛んだだけの話であって、友になったのではない。

＊

もしかしたら、アヴェストリ＝パシクは、ヘトスの時代よりずっと以前の、いわゆるラール人第一次文明時代を心に思い描いていたかもしれない。

今もラール人のあいだには、遙か昔の物語が伝わる。往時のラール人はある遠い銀河で〈あらゆる生命体の敵〉にして強大な敵と戦い勝利した、というのだ。

惑星テラの古代ローマのアルヴァル兄弟団の賛歌にはラールという神が歌われた。惑星オリンプには太古にラール人が何かを警戒して設置したスパイ網の遺跡がある。とすれば、第一次文明時代のラール人が護った遠い銀河とは2110万光年離れたテラナーの銀河系であり、当時の銀河系には強大な敵を退けたさらに強大なラール人が存在したことになる。

＊

そう、アヴェストリ＝パシクに

は過去に戻る動機があったのだ。アトピック法廷によるラルハトーン銀河進出を阻止できたなら……ヘトスの終焉を阻止できたなら……あるいは、第一次文明時代のラル人々に警告して人類の誕生を阻むことができたなら……ヘトルク・テッサーが生まれなければヘトスが滅ぶこともなくなるのである。

5

やがてアトランが光制御信号の影響を脱して目覚めた。

ペリー・ローダンは《ラス・ツバイ》で《ラルハトーン》を追う決意を固める。〈共時性の通路〉を一度出たら《アトランク》に戻れる保証はないが、かといってアヴェストリ＝パシクと配下のラル人たちを野放しにしてはおけない。危惧される最悪の事態がもしこの時代に具現したなら、事は人類の存亡に関わるのである。

裁判官船《アトランク》にアトラン、アヴァン・タクロール、サム・バッタシェー、タウロ・ラコバシ、ジャウナ・トゴヤラを残し、《ラス・ツバイ》は〈共時性の通路〉

をあとにした。

*

巨艦《ラス・ツバイ》が建造されたのは新銀河暦16世紀でありハイパー物理学的抵抗が大きな時代である。対して、西暦紀元前2010万3191年のハイパー物理学的抵抗は小さい。

〈共時性の通路〉を出た巨艦《ラス・ツバイ》と千隻を超す搭載艦艇の機器の性能はおしなべて向上した。だが、性能を揃えるべき機器、あるいは性能を抑えなければ本来の機能を発揮しない機器もある。科学者シク・ドルクスタイゲルは《ラス・ツバイ》がともかく通常に航行できるように応急処置をほどこした。

6

《ラルハトーン》を追って銀河系に入ると、探知機が戦闘行為とおぼしき現象をとらえた。ローダンは、グッキー、シク・ドルクスタイゲルらは《ラス・ツバイ》が搭載する直径200mのミネルヴァ級巡洋艦の1隻《イシ・マツ》で発進し、パロス影バリアで姿を隠したまま様子をうかがった。

問題の星系は、異種族の艦隊に蹂躪されていた。侵略者は圧倒的に強力で、仮借なくしらみつぶしに居住種族を殲滅していく。

傍受した無線から、襲撃者が〈謀叛人の帝国〉またはティウフォル人と称することがわかった。襲われたジョッパキオ種族は〈法典〉コデックス というどこかの組織に支援を要請したが断られて、今こうして滅びようとしている、という経緯も知れた。

ティウフォル人は背の高い瘦身のヒューマノイドで、ほのかに輝く青黒い戦闘衣を身に帯び、踊るような物腰で振る舞う。その小型戦闘艦は星駒とってブーメラン型をしている。母艦は星罌とって全長 5 km の転子状の本体と、本体の前方三分の一あたりに付く円環とからなり、転子と円環がスポーク 4 本でつながる形をしている。

グッキーがテレパシーで探ったところ、星罌は各 1 基の〈呪旗〉という未知のハイパー水晶製の装置を備えることがわかった。ティウフォル人は敵住民を皆殺しにして、その ÜBSEF 定数を〈呪

旗〉に収集しているのである。

＊

巡洋艦《イシ・マツ》のパロス影バリアは艦影を完全に消すはずだった。だが、ハイパー物理学的抵抗の差違を埋める先刻の調整はどうやら充分ではなかったらしい。

ティウフォル人は得体の知れないおぼろな艦影に気づくやいなや襲いかかってきた。質量エネルギー繊維が《イシ・マツ》の防御バリアを食い破り、マルウェアが制御系を麻痺させると、戦闘ロボットが突入してくる。乗員は決死の応戦も虚しく押し負けた。

ティウフォル人は乗員一同の果敢な抵抗に敬意を表し、その場で幾名かの生命を奪っただけで、残りは捕らえて《イシ・マツ》ともども星罌に収容した。

7

星罌《ヨントンティック》艦内は左右対称でもなく、直角な曲がり角もない。箇所によっては有機体のようにも見える不気味なつくりで、何より尋常でなく寒かった。

ティウフォル人たちは捕虜一

同を少人数に分けて収容所に追いこみ、ローダンと〈ローダンの小姓〉とみなしたシク・ドルクスタイゲルだけを客員軍人 ジュロとして司令官 カラドックのもとへ連行した。

司令官オークソン・ビスックは兩名とティウフォル人の試合を楽しみ、試合に勝ったローダンたちふたりに目下遂行中の〈呪旗覇軍〉を見学する榮譽を与える。ふたりにとってティウフォル人が相手種族を殲滅し居住惑星を破壊する様子を見続けるのは苦痛だが、これを通じてティウフォル人のことが多少はわかった……この一族は長く戦いに明け暮れてきた。惑星に基地を築かずに星叟を故郷とし、星のはざままで暮らしてきた、というのである。

星叟《ヨントンティック》の艦載脳とおぼしき艦賢者ゲッンロクは、戦士種族ティウフォル人が信じるカティウファト、たとえるなら北欧神話で戦士の魂が集うとされるヴァルハラにも似た概念のことを、兩名に解説した。

＊

一方、《イシ・マツ》乗員たち

の収容施設では、グッキーが5年前の事故から長く使えなくなっていたテレパシー、テレキネシス、テレポートの三能力の回復を試していた。昔日の能力が完全に回復したからには、乗員たちを脱出させるのも不可能ではない。

ローダンとシク・ドルクスタイゲルが収容施設に戻ったところで、グッキーは兩名を伴い星叟の格納庫に収容された《イシ・マツ》にテレポートした。つづいて乗員たちを次々にテレポートで《イシ・マツ》へと逃がしていく……だが、収容所を見張るティウフォル人たちは脱獄に気づくやいなや捕虜を次々と射殺しはじめ、全員を助けることはできなかった。

巡洋艦《イシ・マツ》に生きて逃れた一同は、搭載するスペースジェット1隻に乗りこむと、巡洋艦を爆破した。爆発は星叟《ヨントンティック》の船腹に穴を開け、スペースジェットは脱出を果たして《ラス・ツバイ》に戻った。

8

昆虫種族ビテツニの斥候マエックとペツニヴァレは宇宙船《キ

ッテネク》でここしばらくティウフォル人の動向を探ってきた。両名の故郷星系イテッミは、ここから37光年しか離れていない。ティウフォル人が目の前の星系を滅ぼし終えたら、次に目指すのはビテッニの惑星ビトガードかもしれないのだ。

ビテッニ政府は二派に割れていた。一派はティウフォル人との交渉に賭けてみようとする主張だが、これが無謀なことは明らかだ。もう一派は〈法典〉に〈紫深〉ブルプトイフェの投入を要請しようとする主張だが、〈法典〉の諸種族にも星系イテッミのために割くほど余力があろうはずもない。

斥候船《キッテネク》のペッニヴァレは惑星ビトガードに無線をつなぐと、ビテッニ政府の高位ティッラメレに第三の案を進言した。すなわち、幾年前このファリスケ=エリゴン銀河に到来したと伝え聞く種族に助けを求めようというのである。その異種族は強力な宇宙船団で〈法典〉に助力している。もしかしたら、ビテッニを助けてくれるかもしれない。

だが、そうするうちにもティウフォル艦隊は星系イテッミに向かおうとしていた。今から助けを求めたのでは到底間に合わない……。

この時、ティウフォル人の星塁で爆発が起きた。見ると、船腹に大穴が開いている。

こうして、星系イテッミのビテッニ政府は幸運にも手にしたこのわずかな猶予期間を活かし、急ぎ進言にもとづきその種族……ラール人に助けを求めた。

9

《ラス・ツバイ》の艦内時計で新銀河暦1517年11月21日のこと、巨艦はめくれあがった〈時割れ〉の前に戻った。

観測してみると〈時割れ〉の歪みが徐々に回復していることがわかった。試しに送りこんだロボット操縦のコルヴェット1隻は、どこへとも……いつへとも知れずに消えうせた。これではもう《ラス・ツバイ》は裁判官船《アトランク》に戻れない。〈共時性の通路〉を抜けて〈時の彼方の国〉に向かうことも、同じく現実時に

帰還することもできない。

＊

こうなった場合のことは《ラス・ツバイ》が発進する前にアトランと申し合わせてあった。すなわち、アトランは《アトランク》で当初の予定通り〈時の彼方の国〉へ向かう。ローダンの《ラス・ツバイ》は自力で現実時に帰還する、というものだ。

《ラス・ツバイ》がいるのは幸いにして過去である。先だつての見積りによれば、光速すれすれの亜光速飛行を230年も続ければ、時間膨張効果で2010万年の時を越えることができる。問題は乗員が230年の歳月を耐えられるかであるが、これについてはサスペンド・アルコールで非物質化してやりすごせば良い。その上で、ローダンもアトランも生きて現実時の銀河系に帰還できたなら、銀河系サウスサイドのハイペロン＝ガル南の近くで落ち合おうと決めていた。

＊

《ラス・ツバイ》は〈共時性の通路〉の内側の《アトランク》が〈時の彼方の国〉へ向けて旅をつ

づけるのを見送った。

《アトランク》が姿を消すと〈時割れ〉は変化し数百km深くなった。シク・ドルクスタイゲルとケロスカーのゴルドロディン、加えて《ラス・ツバイ》の艦載脳アナシは〈時割れ〉をあらためて計測して報告をまとめた。もしかしたら〈時割れ〉を現実時に戻す手立てとして利用できるかもしれない。

ローダンは搭載艦の中からテンシ・ズッコ指揮下の直径500mのマーズ級巡洋艦《タマ・ヨキダ》を選び、〈時割れ〉近くを見張らせることにした。その上で、ローダンはふたたび《ラス・ツバイ》でラル人たちの《ラルハトーン》を追跡するのだ。

アヴェストリ＝パシクだけはなんとしても捕らえなければならぬ。

ペリー・ローダン夏期講習 2015

ストーリー・ダイジェスト

Perry Rhodan-Heft Nr.2800

"Zeitriess" von Michelle Stern

2015/8/30 y.wakabayashi@rlmdi.